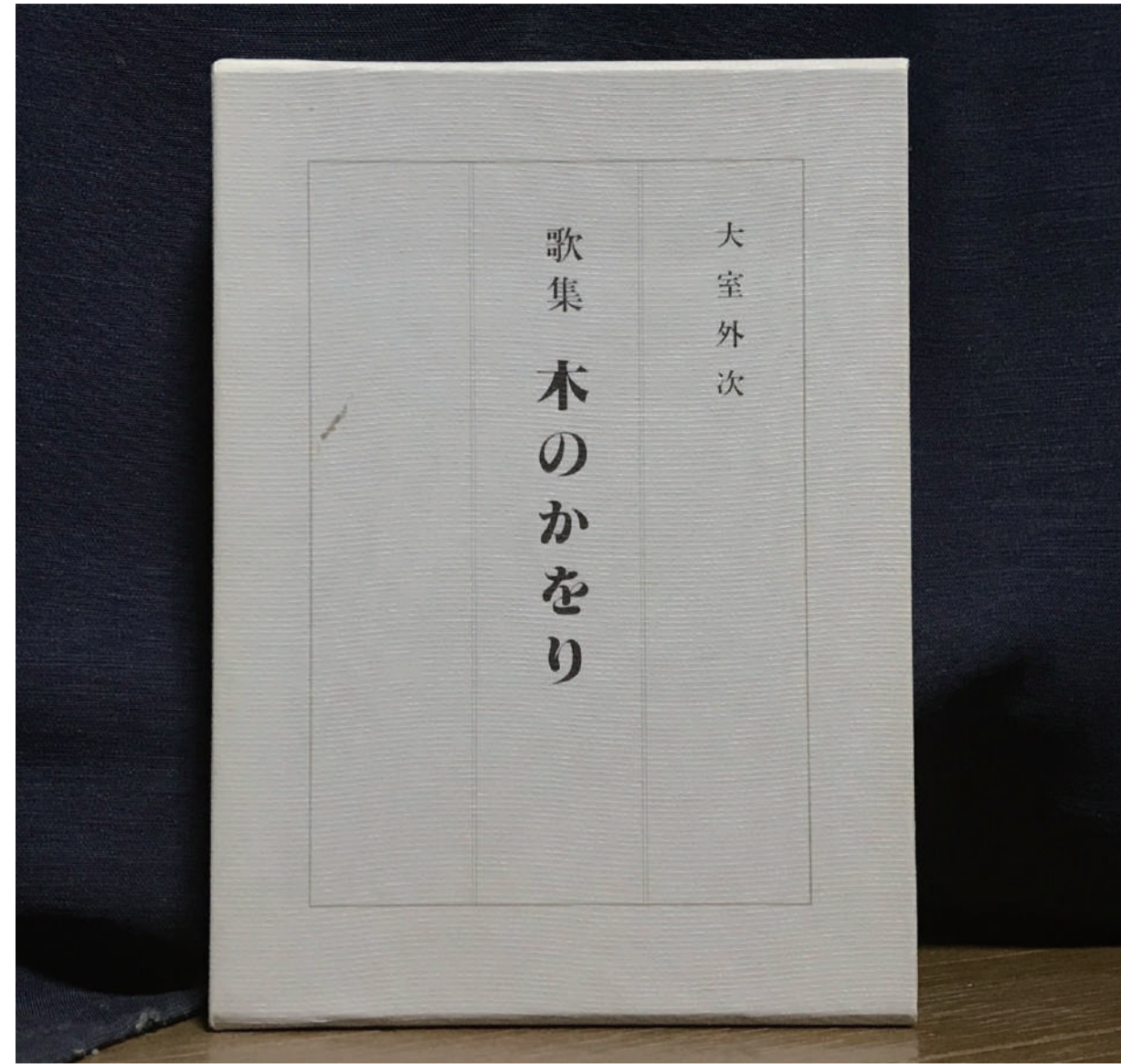




大室  
内

# 歌集「木のかをり」から生まれる空間

祖父の住む街は、蔵王連峰など多くの山々に囲まれることから、古くより小さな製材所が多く製材業が街に活気を与えていた。しかし、大量生産・大量消費による工場の大規模化などの社会の変遷によってこの街で暮らす人々の木材の貯木や加工という地域産業の原風景は失われつつある。本設計では、失われつつある地方の地域性と古くから共有されてきた木材加工の場を、祖父が歌った短歌をまとめた歌集「木のかをり」を手がかりに、地域の人々や訪れた人々が経験してきた原風景の痕跡に沿った懐かしい未来の復活を計画するとともに、言葉から空間を作り出すプロセスに着目した設計手法のプロトタイプを提案する。

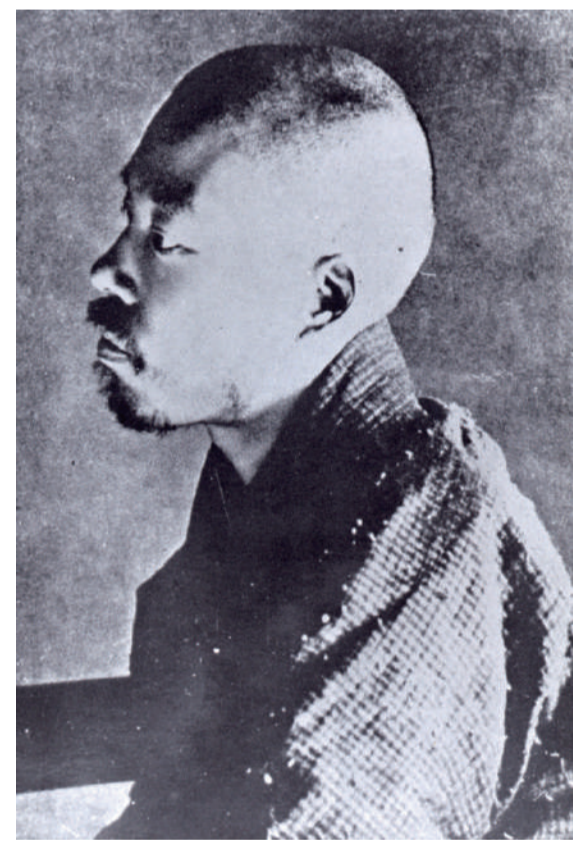


## 歌人としての系譜

祖父が所属していたアララギ派は正岡子規によって立ち上げられた流派で、万葉調と写生を主張した。正岡子規のいう「写生」とは、曰く「画家が天然自然を模写するときのように対象はを精しく観察すべきこと、そして的確に言語化すべきこと」とされ、現実があるがままに表現する素朴で率直な短歌を良しとした。

その後、正岡子規に影響をうけた斎藤茂吉の「実相観入」は、写生という技法が自然を正確に映し出すということに留まらず、対象に自己を投入して、自己と対象とが一つになった世界を具象的に歌うことを目指した。斎藤茂吉の短歌は、祖父を含めた後世の歌人に多大なる影響を与え、継承されていくこととなる。

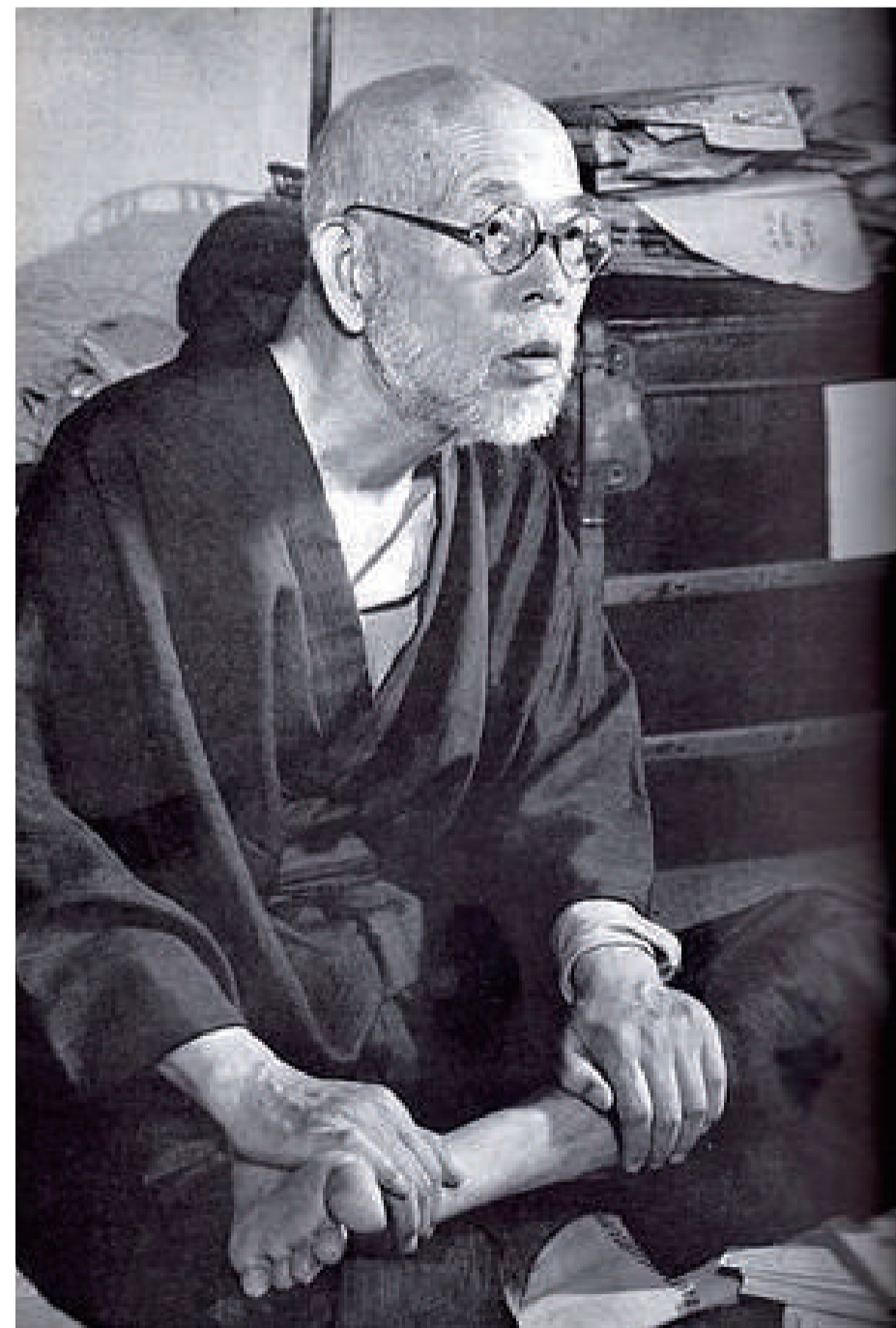
### アララギ派



正岡子規

伊藤左千夫

黒江太郎



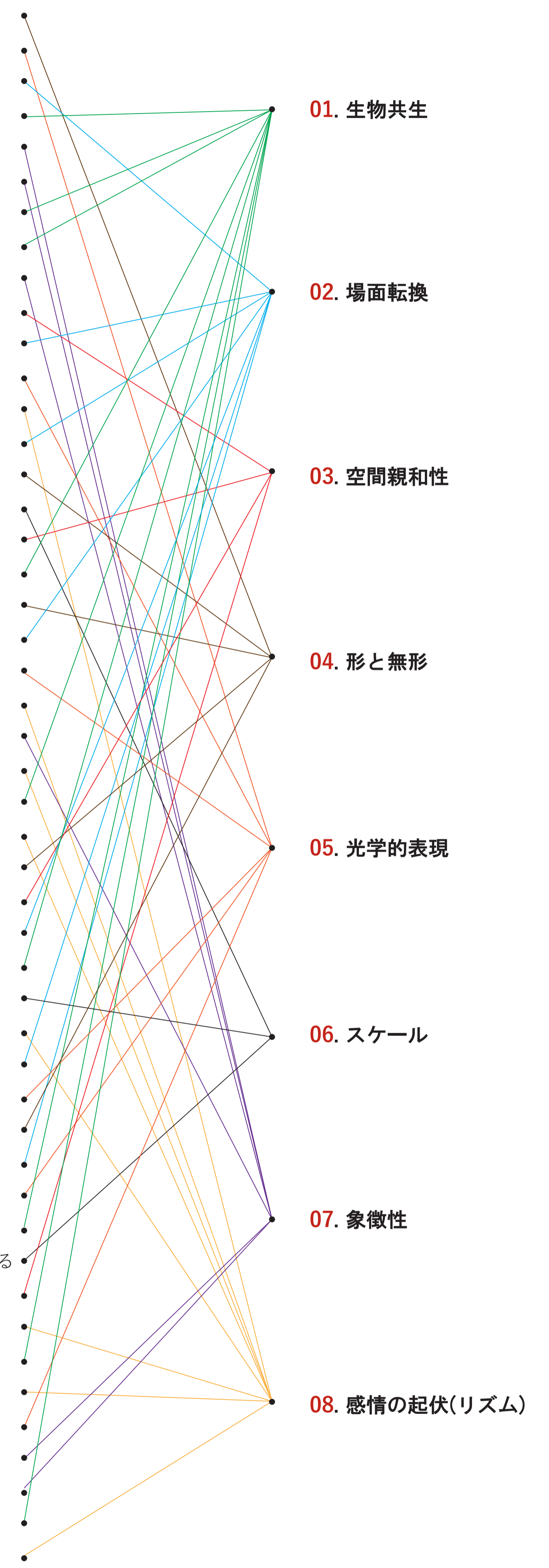
斎藤茂吉

扇畑忠雄

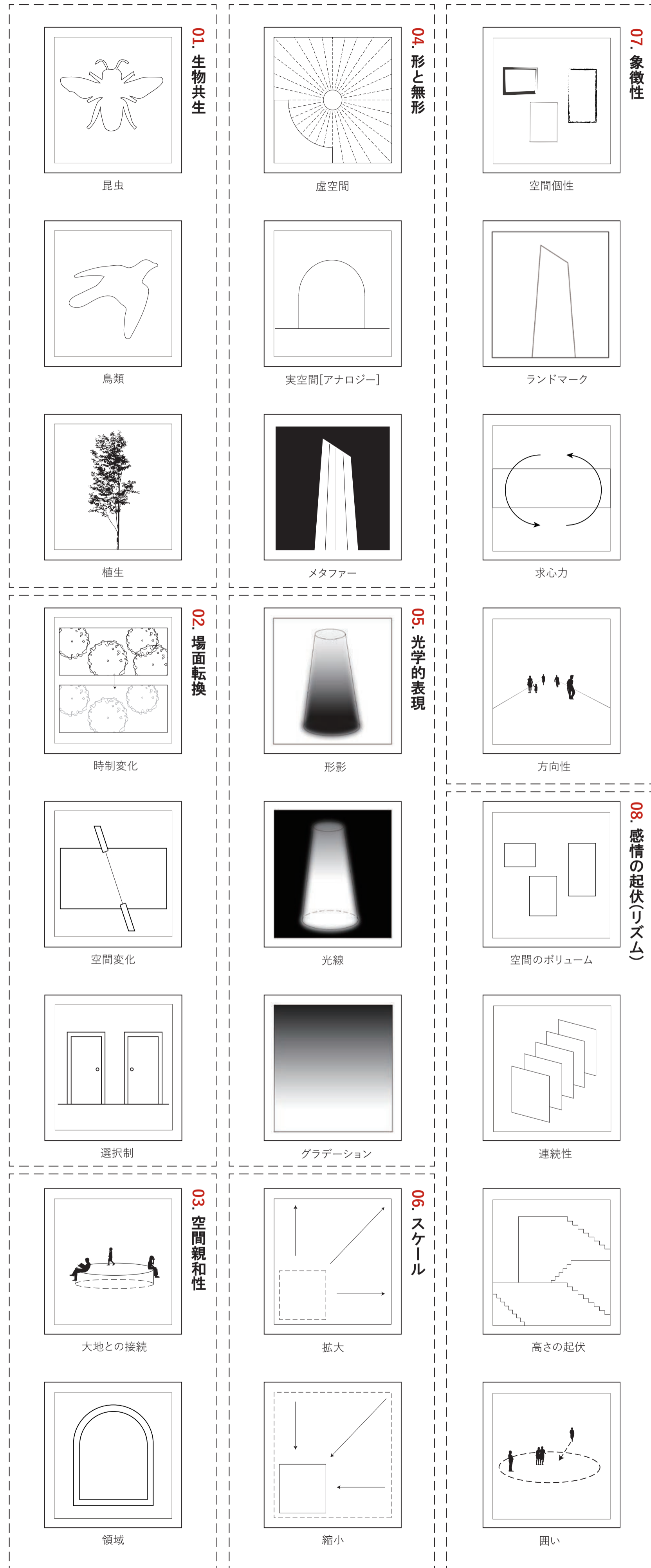
金子阿岐夫

大室外次

冷えし鉄の摺れ合ふ音を侘しみて丸太載せたる台車動かす  
日に照りし雪にこぼるる鋸屑のタベわづかに濡れて沈みぬ  
雪の下の丸太を掘りて挽かむためトラックに幾たびも雪捨てにゆく  
黄に咲くはマンサクの花おしなべて雪の消えたる雑木林に  
栃の木の一もと高く庭に立つ家古びたり建て替えむとす  
両側よりしげる胡桃の樹の下道何考へて通り来し吾か  
丸太積む間に潜み蟋蟀はタベを夜を鳴くべくなりぬ  
秋の日の澄める空気に羽ふるひ丸太の際に黄蜂集まる  
チェーンソーの音を周囲に憚りつつ太き栃の木を二つに伐りぬ  
ミソサザイ鳴きつつ速く枝移る日差す疎林に雪あたらしき  
間ちかく杉立つ暗き林越え瀬音さやけき谷道に出づ  
山どりの動き素早き杉生なか沢吹く風に雪の粉の飛ぶ  
作業衣にも手袋にもしみて木の匂ひするを侘しむ春の日向に  
作業場のめぐりの雪の解けゆきて木屑鋸屑多く散りばふ  
雑木林は芽吹かむとして梢紅し沢の窪地の雪まだ消えず  
坂道を上り下りするダンプカーのひびきに朝吾は目ざむる  
さだまりし一世寂しみ労働に慣れしわが身を出湯に浸す  
単調に嘆くことなく木を挽かむ日毎赤らむ山近く在り  
円錐型に若杉そろふひとつ傾斜秋の日差して杉のかげ越し  
雪の下より次々丸太見え出でて作業場は一日ごとに春めく  
新しき葉の色淡く萌えながらみどり大きく繁る槻の木  
山につづく田原の雪のかがよぶに影ひきて低く練習機飛ぶ  
芽吹きたつ雑木にタベ靄たちてわが決断は覚束なしも  
汗あえてひと日挽きたる桧材の匂ひは夜も身に沁みてぬ  
わが点す鋸研ぐ燈により来るは脚長き蜂太きユスリカ  
凍る木を挽きなづみつつ作業場に一日過ごして疲れしタベ  
二三日前に挽来たる松材の木の香残れり狭き作業場  
暑かりし一日終れば機械掃く目にしみて夏の満月のぼる  
木も氷も区別なきまで冷たきを抱へつつ挽きて汗ばむ冬の日  
冬なかの寒気に丸太凍てつきて製材作業休む幾日も  
休猟区の標札立てる冬の山杉も雑木も尖りたる見ゆ  
木を挽きて終る一生か今さら職変ふる度胸も技倆も持たず  
桃畑の花を見に行くわが願ひ諦め黙し木を挽きてをり  
わが植柔しわづかな杉の育ちある沢の青葉にたちかき風  
丸太の上に丸太を投ぐるにぶき音冬の日暮れの空気にひびく  
冬枯れし野の丸木橋あらはなり夕あかね雲川に映りて  
吹き入りて角材の面に溜りたる雪払ひをり寒き作業場  
作業場の鋸屑まじる雪の上にタベ牡丹雪ふはふはと降る  
遠慮することもなくチェーンソー捻らせて雪の舞ひくる野に丸太伐る  
作業場のめぐりに溜る年越えし木屑に沁みて降る冬の雨  
雨止まずみどり沁む道具見て居れば傘赤き児の過ぎしゆくなり  
近寄ればくれなる芽吹く雑木々の中に混りて咲けるマンサク  
すでに亡き父に聞きたる林界を溝が境と今日子に伝ふ  
雪山の疎林ひとところ朝の日のかよひて待つ春はも近き  
窓半ば雪に埋もれし作業場に灯をつけて挽く凍りたる木を  
機械止め騒音絶えし夕しばし若葉の山の郭公を聞く  
枝裂けし樽の木口のいたいたしき林の残吹雪く風のあり  
作業場のめぐりに解くる雪塊にかかづらひみて一日短し



# 空間構成概念図



## 24 の風景の痕跡

### 13[1]. アトリエ

建築内で東西に大きく伸びた広葉樹を加工するアトリエ。アトリエは、一般の人たちへ向けても開放されており、モノが生産される場所に当事者として参加することができる。生産される過程が民主化され木材の存在や想像的な活動を誘発する環境を提供する場所にもなる

### 06. 街への眺望を運ぶ展望台

祖父の育った街を望むことができる展望台。斜面の敷地に建つこの場所からは、街を見下ろすことができる美しい風景が広がっている。

### 23. 河川を望むラウンジ

祖父の育った街を望むことができる展望台。斜面の敷地に建つこの場所からは、街を見下ろすことができる美しい風景が広がっている。

### 16・41. 地階から2階まで続く吹き抜け

地階のギャラリーから2階までヴォイドによって空間が繋がっている。トップライトから差し込む自然光によって各階が明るく照らされ、関係性を持つ。

### 14. 林界の光

林の情景から想起されたホール。格子状に梁がかけられた空間は、時間の変化によって内部空間に様々な光と影の演出を起こす。ホールは一般の人たちも利用することができるフレキシブルな空間として機能する。

### 21. スケールを変化させる通路

斜めに置かれた壁により外と内にスケールの変化を与えながら空間を二分する。屋内から屋外へ移動する際の空間の動きによって、隣り合う空間は互いに強調し合い劇的な空間体験を体験者に与える。

### 24. 外部とつながるギャラリー

緩やかな斜面を登った先につながるギャラリー。この空間へのアクセスは、外部からのアクセスに絞られ、大きく空へ吹き抜けている。視覚的・感覚的に関係性をもつ場所として、外部と共鳴しながら空間は体験者と同期する。

### 15. 景色を切り取るギャラリー

短歌で詠まれる著者の感情の起伏をリズムという形で空間概念として落とし込まれている。感情の起伏(リズム)によって風景が切り取られた意は、ギャラリーに様々な光学的演出と、異なる風景を切り取った空間体験を与える。

### 40. 大地と接続する

切り株の形態を引きつながら、内部空間は抽象化された光学的表現により虚実空間として美しく構成されている。また、ランドスケープ的にも切り株のもつ親和性を持った特徴を持っており地下から屋外にも建築の一部が飛び出しておりベンチやテーブルとして扱われることを想定している。

### 02. 連続スロープ

製材所内、アトリエ、斜面をつなげるテラス。3つの領域の結末点の役割を果たす。

### 13[2]. 製材所とアトリエを繋ぐ通路

製材所内をリフトや人が行き来する。製材所とアトリエを繋ぐ結末点として機能する。周囲から多く採光を取り込むことができるように設計し、作業がしやすい環境と日溜りの情景を作る。

### 09. 夜の展望台/動く工場を覗く

昼は広葉樹製材のために機械や人が動く製材所の様子をテラスから一般の人たちがその情景を音や視覚で体感することができる。また、夜は人工の光源が届かない山側から星空を眺めるための夜の展望台として機能する。

### 12. 製材所

広葉樹の製材を主とした工場で、木材を丸太から挽くための設備や導線の計画がされている。工場から直接アトリエに木材を搬入することが可能で、効率的かつ木材加工の現場がより近い存在として認識される。

### 19. 倒木の虚実空間

倒木のアナロジーから斜めに吹き抜けが伸びた空間で、本来存在しない物体の虚な内部環境から空間が想起されている。

### 18. 製材所を覗くギャラリー

製材所側に大きく開口を切り取られた空間。丸太が製材される様子やリフトが行き来する様子を展示空間に見立てて視認する。

### 42. 虚な情景

他の室よりも天井高が抑えられたギャラリー空間の中で、光を取り込み、虚実空間を体験する象徴的空間。本来空間を持たないはずの場所から想起された空間は虚な表現のあり方を問いかける。

### 20. 連続するシークエンス

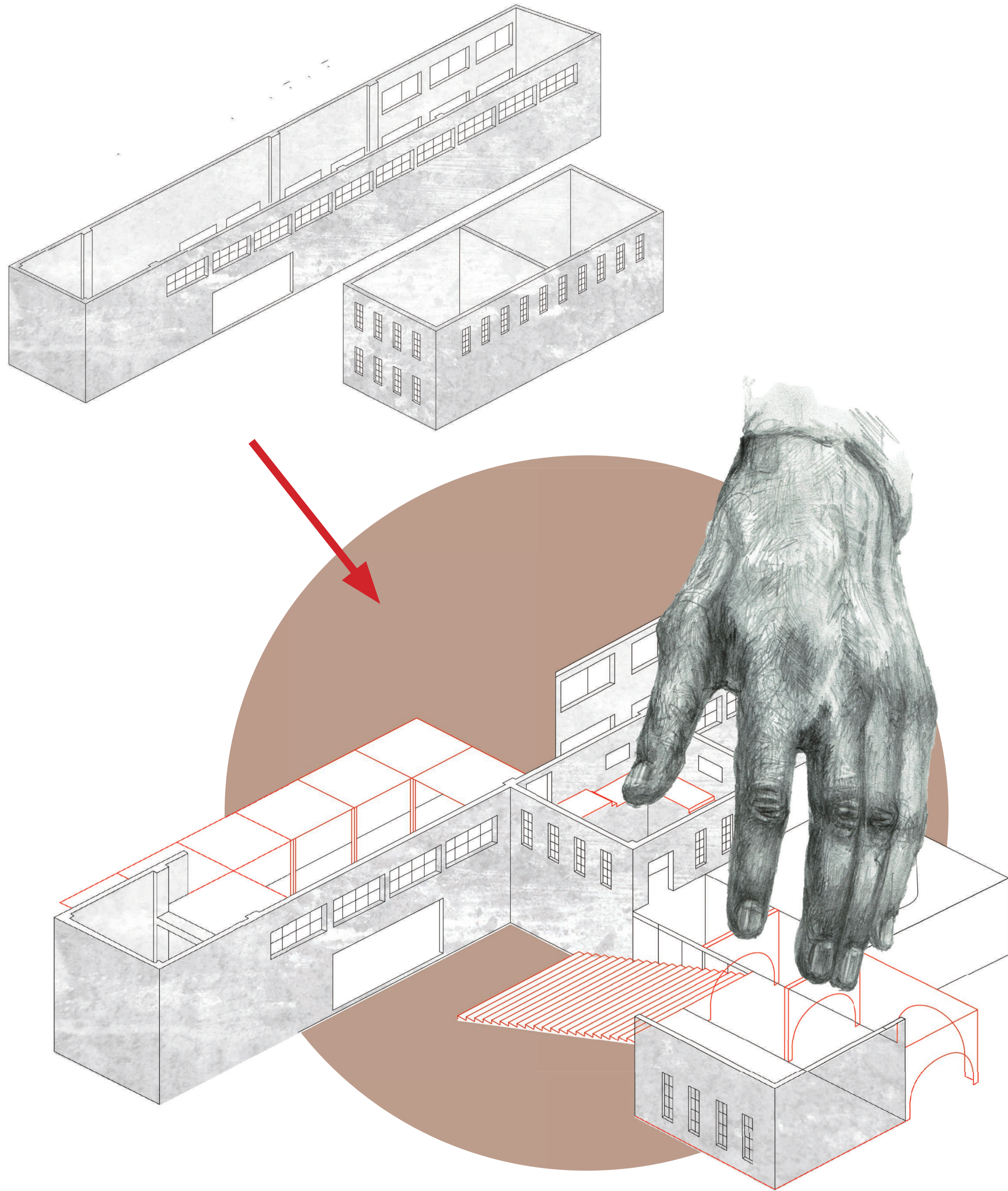
丸太のアナロジーから想起された空間積層に埋もれた半円の空間が連続し、左右に空間を展開しながら空間をつなげる。

### 39. 地階のギャラリー

### 緩やかに土地をのぼるスロープ

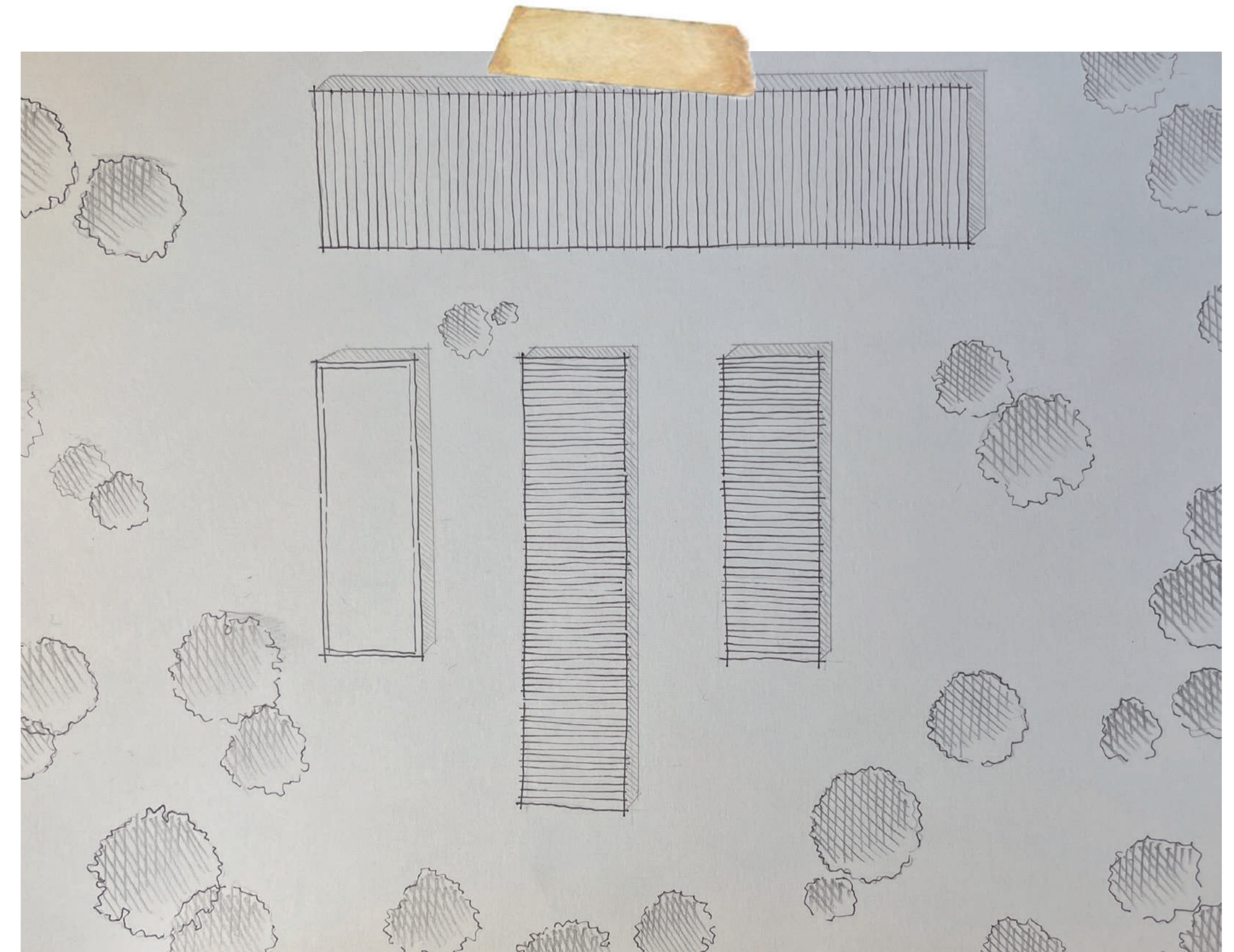
林道の情景要素が強く反映された空間。高い壁によって視界に大きな制約が設けられるが、それによって上部に見える空や、視界が徐々に開けるシークエンスの変化が強調される。長いスロープを緩やかにのぼる空間で、製材所の音などがスロープをのぼるにつれて存在感をまして近づいてくる。





### コンセプト

敷地は山形県南陽市の山間に位置する廃工場。産業遺産を後世へと継承するための増改築に伴い、老いた建物だから持ち得る新たな価値を見出す提案とする。



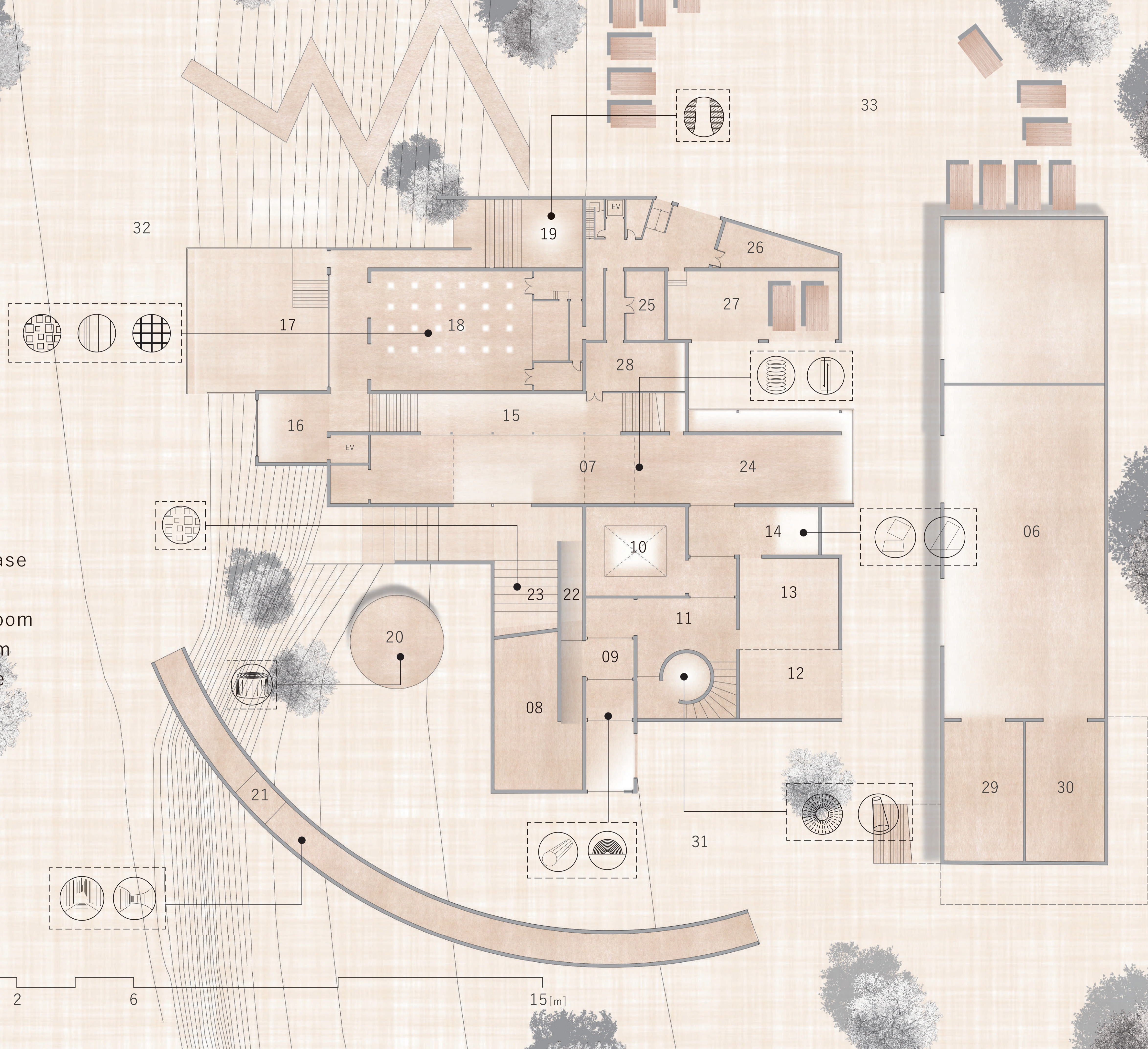
### ダイアグラム

木々に囲まれる中で、屹立として建つ廃工場に対して、廃工場をスライドさせることで居場所をつくり、そこに生まれた間を繕うことで価値を高める。



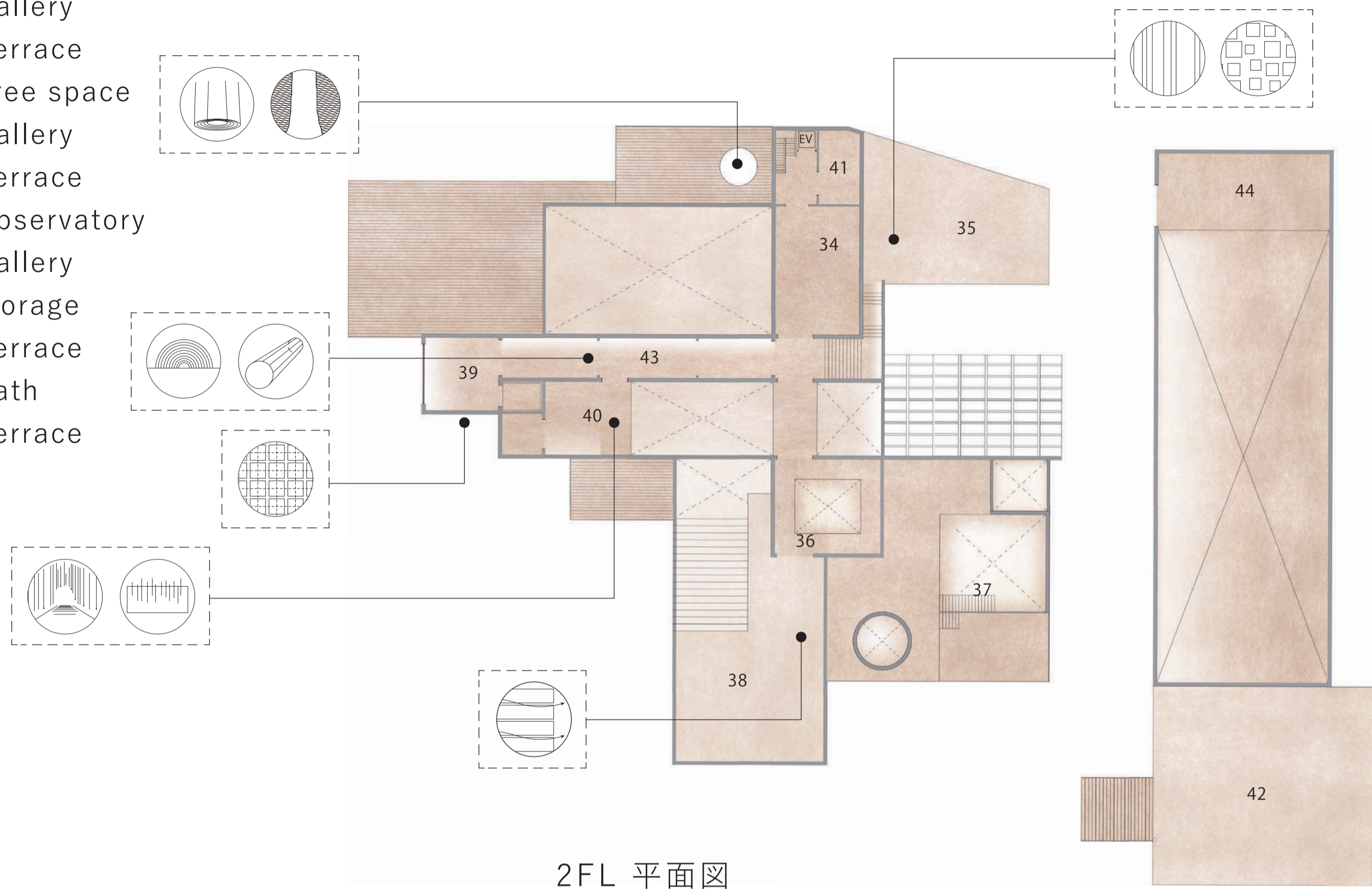
大室  
内

- 06.Factory
- 07.Atelier
- 08.Gallery
- 09.Gallery
- 10.Gallery
- 11.Gallery
- 12.Public space
- 13.Gallery
- 14.Gallery
- 15.Path
- 16.Gallery
- 17.Gallery
- 18.Hall
- 19.Terrace
- 20.Gallery
- 21.Approach
- 22.Path
- 23.Grand staircase
- 24.Gallery
- 25.Conference room
- 26.Machine room
- 27.Wood storage
- 28.Office
- 29.Storage
- 30.Storage
- 31.Public space
- 32.Public space
- 33.Public space



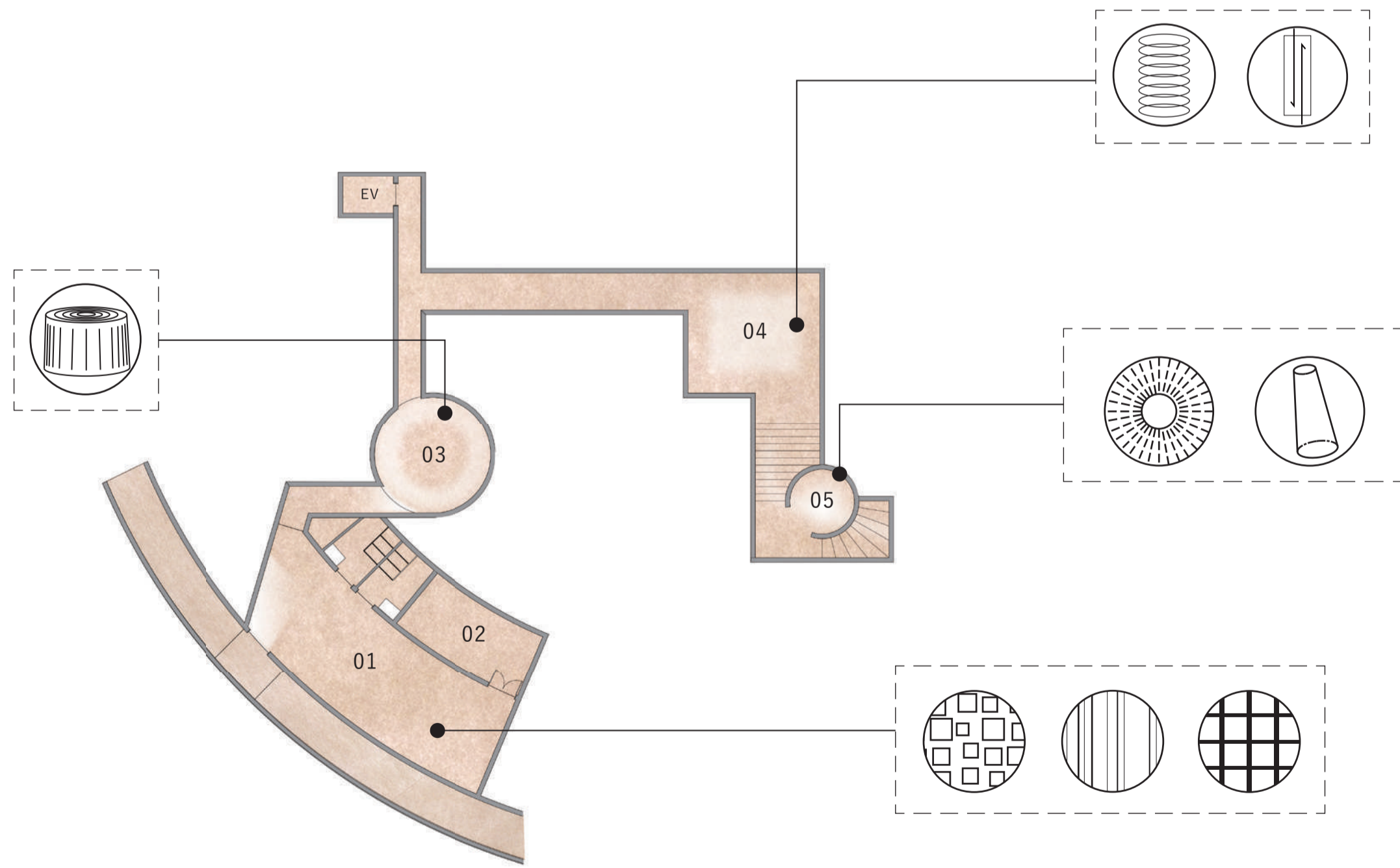
1FL 平面图

- 34.Gallery
- 35.Terrace
- 36.Free space
- 37.Gallery
- 38.Terrace
- 39.Observatory
- 40.Gallery
- 41.storage
- 42.Terrace
- 43.Path
- 44.Terrace

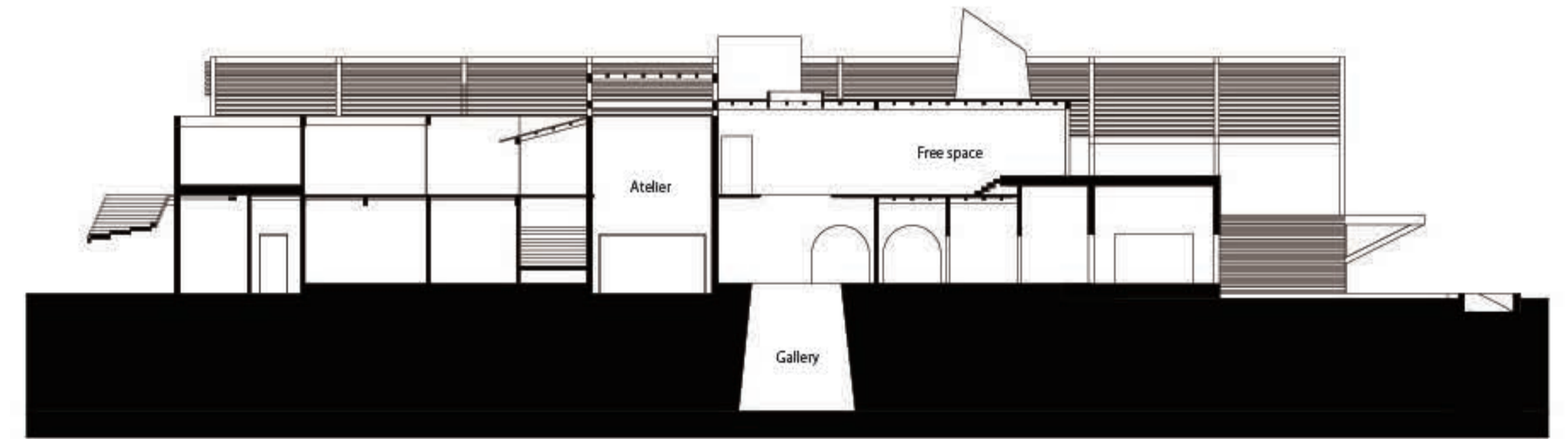
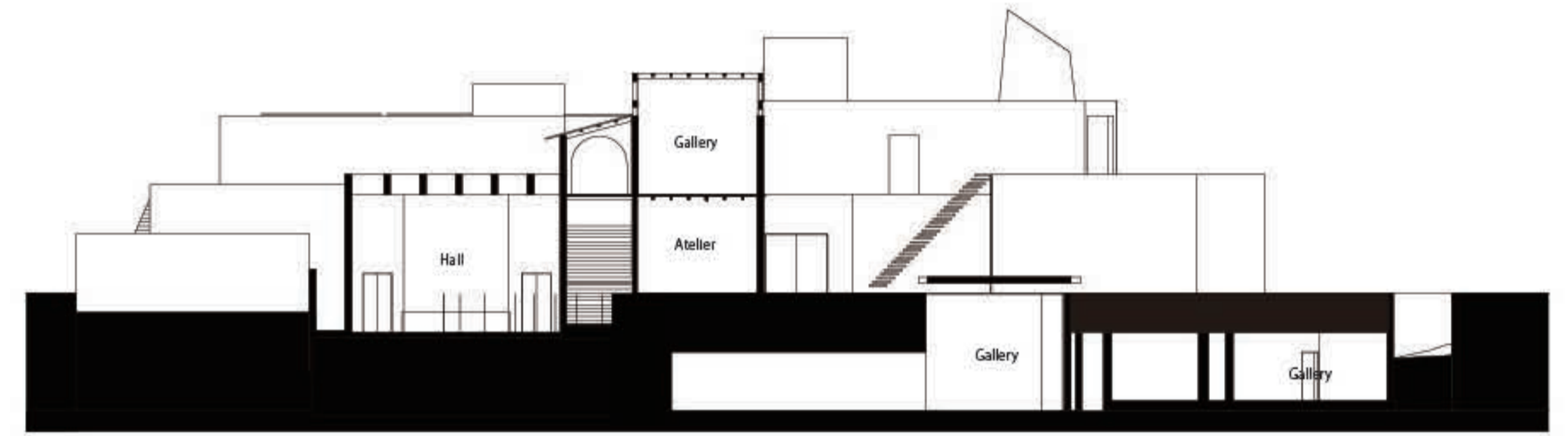
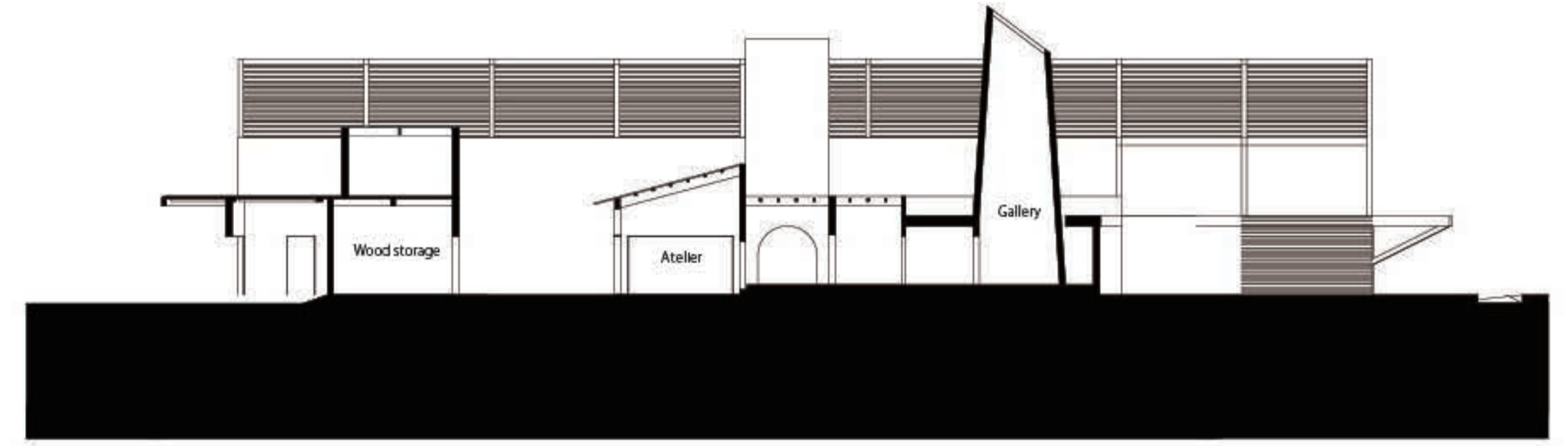


2FL 平面图

- 01.Gallery
- 02.Storage
- 03.Gallery
- 04.Gallery
- 05.Gallery



BFL 平面图





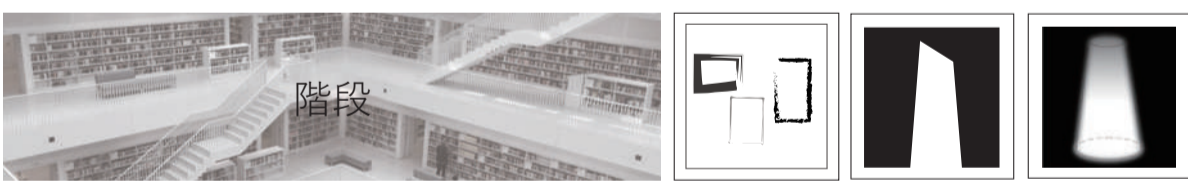
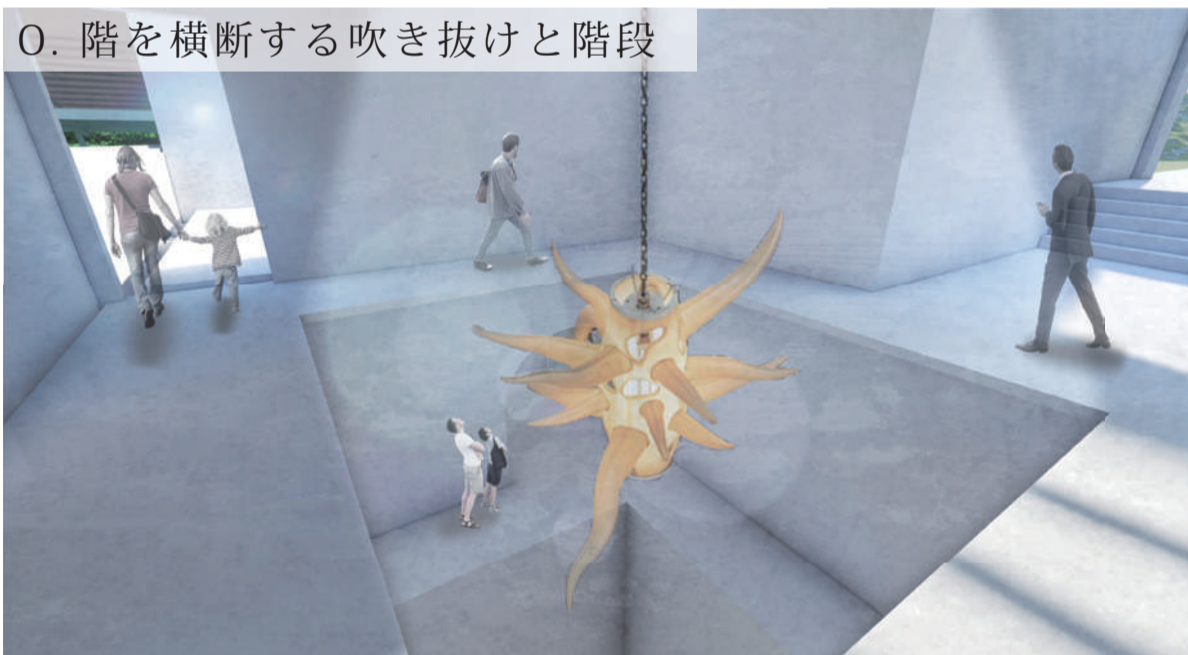
園なかの茂る木立に日照雨降り  
映ゆるみどりをひとり見てをり

現存する工場の外壁を保存しながら、ミュージアムの一部として人々が集う

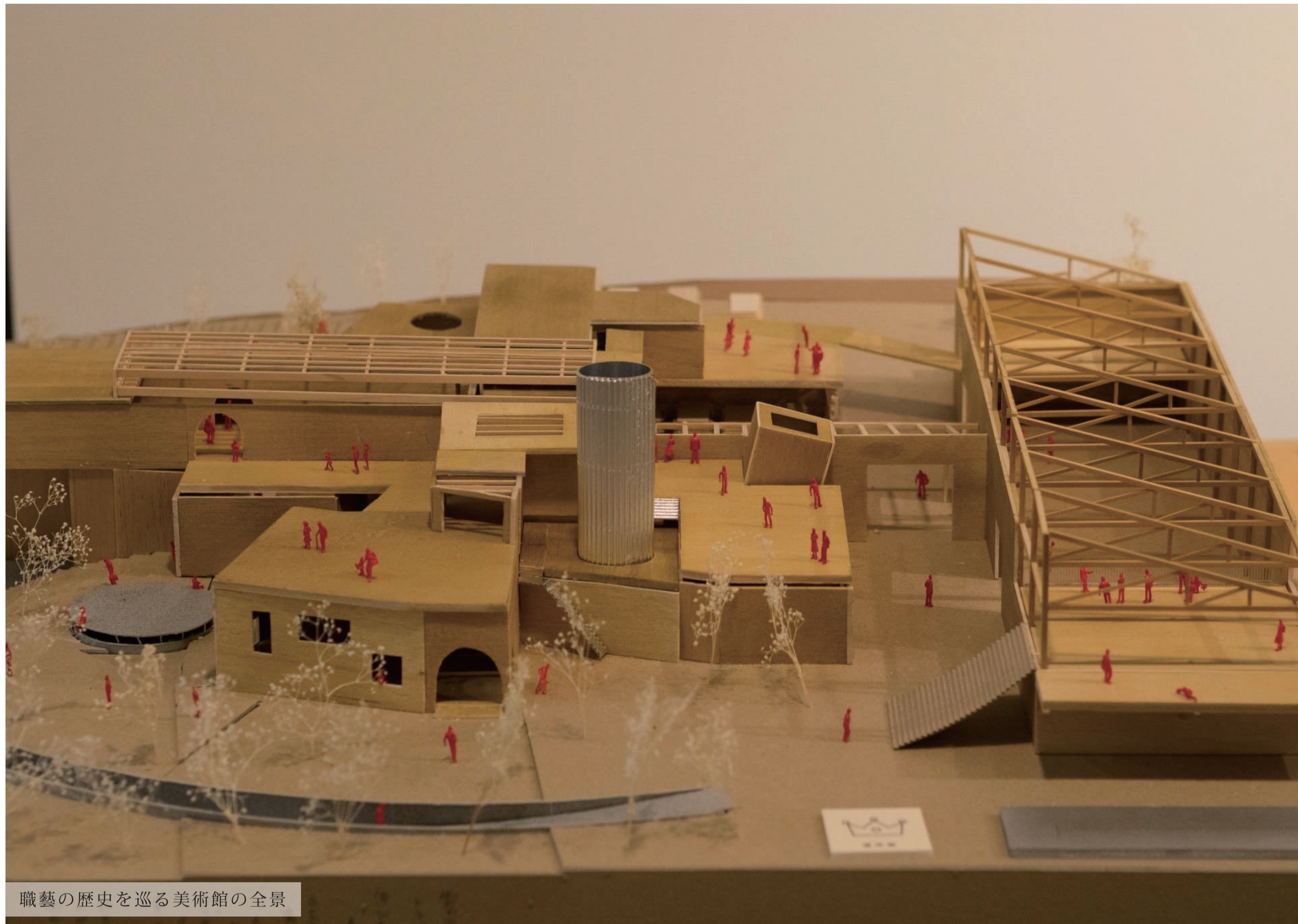


二三日前に挽来たる  
松材の木の香残り狭き作業場

最も大きく残る建物を利用して、静態保存された産業遺産を展示する







職藝の歴史を巡る美術館の全景



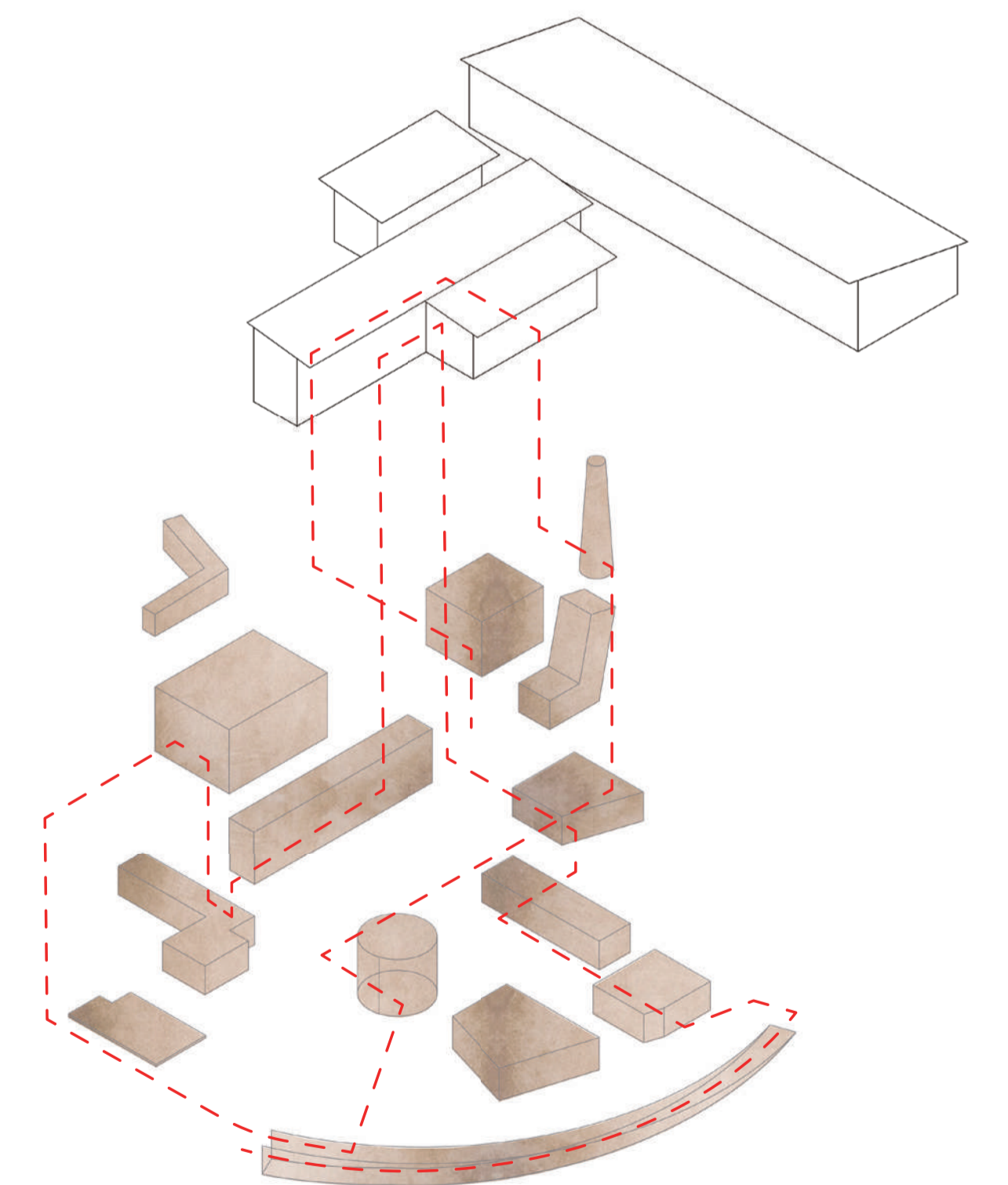
閉鎖的だった崖地から街を望む



材木置場だったエリアは広場として活用する



廃工場を中心として縫うように展示空間を巡る



**既存の廃工場**  
山間の廃工場を美術館へ転用することで新旧の統合を測る。

**情景空間**  
廃工場の余剰を繕うように、短歌になぞられた振る舞いの空間を創出していく。

